

ディートマー・ゴルトシュニク教授の講演会を聴いて

佐藤 英

2005年度は、例年になく、ドイツ語圏からの招待講師の多い一年であった。ヴォルフガング・ハックル教授、エルフリーデ・ツェルダ氏、ペーター・ケルン教授に続く4番目の講師が、オーストリア・グラーツ大学で教鞭をとっておられるディートマー・ゴルトシュニク教授であった。演題は「作曲された詩——フーゲー・ヴォルフとエドゥアルト・メーリケ——」で、講演は2005年10月5日の午後6時から早稲田大学文学部の第5会議室において行われた。

当日は講演会に先立ち、本学のエーバーハルト・シャイフェレ教授からゴルトシュニク教授のプロフィールが紹介された。この紹介によると、ゴルトシュニク教授のご専門はドイツ文学で、これまでムージル、ビューヒナー、ハイネ、カール・クラウス等々で論文や著書を刊行されているという。なおゴルトシュニク教授は、ここ数年来、日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』のドイツ語版の編集作業に携わっておられ、日本にもたびたび来日されているとのことである。

さてゴルトシュニク教授は、ヴォルフの作曲によってメーリケの詩が忘却から免れたこと、そしてメーリケの詩の文学史的な位置付けを確認した後、本題を始められた。ここで取り上げられたのは、フーゲー・ヴォルフが1888年2月16日から11月26日までの間に作曲した、全部で53曲からなる『メーリケ歌曲集』からの7編の詩。すなわち、「希望を抱く病氣回復者」（1888年3月6日作曲）、「ペレグリーナ（I）」（1888年4月28日作曲）、「乙女の初恋の歌」（1888年3月20日作曲）、「尽きることのない愛」（1888年2月24日作曲）、「エオリアン・ハーブに」（1888年4月15日作曲）、「おお、魂、おもい見よ」（1888年3月10日作曲）、「別れ」（1888年3月8日作曲）の7編である¹⁾。講演の趣旨は、メーリケの詩の音楽的性格に誘われ、ヴォルフがリートを作曲したことを示すことであったので、ゴルトシュニク教授は個々の詩を朗読し、それに詩の解説とCDによる音楽鑑賞を交えながら講演を進められた。

ゴルトシュニク教授の詩の選択は、メーリケとヴォルフ双方の伝記的事情を汲み取り、その個々が抱えていた問題を端的に示すばかりか、両者を結ぶ線をも描き出す目的に適ったものであったと思われる。『メーリケ歌曲集』の第1曲「希望を抱く病氣回復者」に現れる死のモチーフは、ヴォルフの中に巢食う、癒されない傷としての性病とそれから来る死への不安と重なりあう。このようなメランコリーは、この歌曲集の最後の曲「別れ」に

1) この邦題は、エリック・ヴェルバの『フーゲー・ヴォルフ評伝——怒れるロマン主義者』の訳書（佐藤牧夫・朝妻令子共訳、音楽之友社、1979年）の巻末に付された作品一覧によるものである。

至って、死の恐怖を克服した過度に陽気な気分から、生への皮肉に満ちた勝利のワルツへと変貌している（ゴルトシュニッック教授によれば、リヒャルト・シュトラウスの『ばらの騎士』のオックス男爵のワルツに通じるものがあるという）。この大枠を踏まえつつゴルトシュニッック教授は、メーリケがマリア・マイヤーとの体験を反映させた「ペレグリーナ（I）」には、男女の性愛に潜むモラルと欲望、幸福観とデモーニッシュなものとの緊張関係を認め、ヴォルフの音楽にもこれが描き出されていると指摘する。民謡調の「乙女の初恋の歌」には、メーリケの愛の詩に特徴的な官能的苦痛という混ぜ合わせの感情が表れているが、ヴォルフは、手紙でも述べたように、この詩をデモーニッシュな側面から読み取った。残りの詩についても、韻律的な要素、愛のはかなさなどを扱いながら、解説が行われた。

ゴルトシュニッック教授の講演は、ヴォルフの手紙の引用やその伝記的情報を詩の解説の際に随時挿入することで、メーリケばかりではなく、ヴォルフの側の事情も明らかにするよう考慮されたものであった。こうした情報性あふれる解説とともにリートを改めて鑑賞することで、作曲者が詩を自分のものとして捉え、そこからリートを作り出そうとする瞬間の、熱気のようなものをある程度描き出すことに成功したのは事実だろう。しかしそれならばなおのこと、音楽それ自体の解説がほとんど行われなかったことが残念に思われた。メーリケの詩に音楽を招きよせる瞬間が多々あるのであれば、伝記的問題と音楽の感興とをただ重ねあわせるのではなく、音楽世界へと踏み出し、詩との緊張関係の中で論じるべきではなかったか。

講演の後、質疑応答の時間が設けられた。最後に取り上げられた「別れ」の末尾につけられたワルツが強烈な印象を残したこともあり、しばしの間、この音楽に関する歓談が続いた。その後話題は日本におけるメーリケ受容、とりわけこれまで日本語に翻訳された作品へと移った。この点に関しては藤井明彦教授から、日本語へと翻訳されたドイツ文学作品全体を見据えた解説がなされ、会は終わりとなった。